

学位論文題名

*A Memory Alchemist: Vietnam, Psychoanalysis,
and Aesthetics in Tim O'Brien's Works*

(記憶の魔術師～ティム・オブライエン作品における
ベトナム戦争・精神分析・美学)

学位論文内容の要旨

本論文は、ベトナム戦争帰還兵の作家であるティム・オブライエンを自伝的作家と位置づけ、彼の作品に色濃く映し出されている自らの経験や思想を検証し、同時に、彼の文学と戦争文学を読み解く上で鍵概念となる歴史性や精神分析との関係をも模索するものである。本論文は、これまでの研究の成果を評価しつつも、オブライエンの一側面のみに傾きがちなこれらの研究が、戦争証言者と小説家の両面を持つ作家の研究、つまり総括的なオブライエン論になっていない点を批判し、オブライエンを歴史・精神分析・美学から横断的に検証するものである。第1部「ベトナム戦争」では、新歴史批評の理論を軸に、ベトナム戦争とオブライエンの生涯との結びつきを探ることで、作品中に表れる歴史性や反ベトナム思想を確認している。続く第2部「精神分析」では、心理批評の理論を軸に、戦争や帰還兵たちの記憶がどのような形でオブライエン作品や他作家のベトナム戦争の作品に投影されているのかを検証している。また第3章「美学」では、ポスト・モダニズムの理論を軸に、読者を小説に引き込むオブライエンの文学的技法を論証している。

「序章」では、これまでのオブライエン研究における諸問題を概観し、それらが成し得なかった領域、つまり自伝研究・作品研究・比較文学研究を併せ持った総括的なオブライエン論の検証の意義を説くとともに、ベトナム介入に至ったアメリカの政治的背景とそれに反発するベトナム帰還兵作家たちの台頭から現在までの経緯についても触れている。

第1部では、オブライエンのアメリカに対する批判的な姿勢を検証するわけだが、第1章「歴史」ではまず、大統領たちのベトナム戦争への関与や戦後における彼らの帰還兵に対する対応を、またアメリカ国民の精神史やベトナム後遺症を再考することで、負けた戦争の記憶や戦争犯罪の事実を忘却しようとするアメリカの国家的欺瞞を浮き彫りにしている。具体的には、年代順に、まず最初の「背景」では、紀元前から1945年までのベトナム共和国の成り立ちと他国の植民地政策に対するベトナム民衆の蜂起の歴史について触れ、続く「起源」では、1945年～64年までのフランス人との第1次インドシナ戦争について、また「戦争」では、64年～75年までのアメリカ人との戦いについて、最後の「戦後」では、アメリカのベトナム戦後史について確認している。また、第2章「ティム・オブライエンの生涯」では、彼のインタビュー記事などを参考に、アメリカの陰謀の歴史に対するオブライエンの告発を、彼の生涯や思想と共に検証している。最初の「背景」では、オブライエンの出生から少年時代まで(1946年～60年)について、次の「起源」では、彼の高校・大学時代から徴兵まで(60年～69年)について、続く「戦争」では、

彼の兵役時代（69年～70年）について、そして最後の「戦後」では、彼の帰還後の創作活動から現在まで（70年～）についてまとめている。この章ではアメリカのベトナム介入を批判しながら、自らの面目のために兵役を決断したオブライエン罪の意識と、新たな戦争や核の脅威に対して警鐘を鳴らす彼の戦後の創作遍歴を中心に検証する。

第2部では、オブライエン作品における登場人物たちの心理分析と彼らに投影されているオブライエン自身の経験や思想を検証している。第1章「記憶」では、作品での記憶の扱われ方やその特徴、また創作過程上での彼の治療方法を探るわけだが、最初の「断片化」では、政治目的や軍事戦略に一貫性を欠いたとされるベトナム戦争の記憶の断片的表象化について、次の「吐露」では、戦争の記憶を当時抱いた激しい感情と共に言語化する治療の過程について、そして最後の「浄化」では、過去の記憶との対峙によってもたらされる体験者の精神の浄化や彼らが生存者としての役割を再認識する過程について論じている。ここではオブライエンや他作家のベトナム戦争文学の作品分析が中心となっているが、一部、戦争体験によって形付けられる記憶の特徴についての専門知識、主にアメリカ精神分析学会の見解、ベトナム帰還兵を専門に研究するリフトンら現代の精神分析者や臨床心理医の意見も参考にしている。第2章「トラウマ」では、実際にオブライエンを含めたベトナム帰還兵が体験する戦争トラウマの症状や種類を論じるわけだが、最初の「徴兵の衝撃」では、徴兵の衝撃と出兵前の葛藤について、次の「殺人者の罪」では、戦場で敵兵や非戦闘市民を殺傷することでもたらされる罪悪感について、続く「生存者の恥」では、誤射撃などで部下を失う上官の心情や僚友を救えなかった兵士の生存者としての罪の意識について、そして最後の「外傷性ストレス症候群」では、帰還兵の罪悪感や疎外感を、またそれらを拒絶、隠蔽しようとする彼らの苦悩に満ちた生き様について検証している。

第3部では、小説の世界へ読者を巧みに引き込むオブライエンの語りの美学とその技法について検証している。第1章「語り」では、オブライエンが採用するいくつかの語りの手法を探るわけだが、最初の「告発」では、誤った戦争を作り上げたアメリカ政府高官に対する語り手や登場人物の憤りや批判について、次の「告白」では、兵士や帰還兵が抱える罪や恥の意識化、秘密、恐怖心、自己嫌悪感などの自白について、そして最後の「語りの物語」では、戦争の真実を語ることそのものを意識化・虚構化する手法について論証している。続く第2章「技法」では、読者の存在を常に意識し、立体的な小説の世界を構築するオブライエンの技法を検証するわけだが、最初の「対比」では、時間や場所、人物や事象の相称と対称について、次の「記憶の再来」では、瞬間的・断片的な記憶の再来について、続く「幻覚」では、困難な場面で登場人物たちが体験する幻覚や空想、想像力の飛翔について、そして最後の「象徴」では、事象や現象、人物や時代の象徴化や比喻について論証している。これらの文学的仕掛けを作品中に用意し、読者を小説へと引き込むことで戦争の真実を訴えようとするオブライエンの技法は、他のベトナム帰還兵作家には見られない。したがって一部ではあるが、この章では彼の作品群と他のベトナム帰還兵作家の作品や他の戦争の作品との比較研究を行うことで、オブライエンの小説家としての技量の高さをも探っている。

「結論」では、戦争の真実や悲惨さ、また罪の意識に蝕まれる戦争体験者たちの戦後の苦悩を小説で描くことにより、反戦を呼びかける作家ティム・オブライエンの文学の価値について論じている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 瀬名波 栄 潤 (文学部西洋文学講座)
副 査 教 授 長 尾 輝 彦 (文学部西洋文学講座)
副 査 助教授 村 田 勝 幸 (文学部歴史文化論講座)
副 査 教 授 伊 藤 章 (大学院国際広報メディア研究科)

学 位 論 文 題 名

A Memory Alchemist: Vietnam, Psychoanalysis, and Aesthetics in Tim O'Brien's Works

(記憶の魔術師～ティム・オブライエン作品における
ベトナム戦争・精神分析・美学)

本論文の研究成果

本論文は、ベトナム戦争帰還兵の作家 Tim O'Brien を autobiographical writer (自伝的作家) と位置づけ、彼の作品に色濃く映し出されている自らの経験や思想を検証し、同時に、彼の文学と戦争文学を読み解く上で鍵概念となる歴史性や精神分析との関係を探る。注目すべきは、作家の作品を個別に紹介・分析するのではなく、それらを脱構築し個々に共通する部分をまとめて横断的に再構築することにより作家の人間像並びに作品像をわかりやすくまとめている点である。

本論は、3部に分けられており、第1部を“Vietnam”、第2部を“Psychoanalysis”、第3部を“Aesthetics”と題している。

第1部の“Vietnam”では、New Historicism の理論を軸に、アメリカのベトナムへの政治的介入、またポスト・ベトナムにおける政府のベトナム帰還兵への対応に対して、自伝的作家オブライエン個人が、いかに批判的な立場を取り、彼らの複雑な心情を作品に反映させているのかを検証している。ベトナム戦争通史における大統領と国民の精神史を再考することで、負けた戦争の記憶や戦争犯罪の事実を抹殺しようとするアメリカの国家的欺瞞を浮き彫りにした後、“Tim O'Brien Interviews”でそのような自国の陰謀遍歴に対するオブライエンの告発を、彼の生涯・思想と共に検証することにより、作家個人の政治的立場を明確にしている。

第二部の“Psychoanalysis”では、心理批評の理論を軸に、オブライエン作品における登場人物の心理分析を行い、それらを作家の心の揺れ (Anxiety) を反映するものと位置付け、ベトナム戦争の大義名分に疑問を抱いておりながら、自分・両親・地域への面目のために出兵したオブライエンの複雑な罪の意識を検証している。これは、いわゆる Harold Bloom 以降の Anxiety 批評を踏襲するものであり、最近注目されている自伝批評の一形式でもある。

最後の第3部“Aesthetics”では、Post-Modernism の理論を軸に、オブライエンの美

学と技法について検証し、“Narrative”では、“Accusation”、“Confession”、“Metafiction”など、常に読者の存在を意識する彼の語りの方法を、続く“Devices”では、“Contrast”、“Flashback”、“Illusion”、“Symbolism”など、読者を作品へ引きずり込む彼の文学的仕掛けを検証している。各作品を新批評（New Criticism）的技法によりそれらに共通する特徴を抽出して分類化することにより、ストーリーテラーとして高く評価されるオ布莱エンのポストモダン的な語りの魅力を分析している。

最後に注目すべきは、インデックスとして注釈付引用文献一覧が添付されており、これまでのオ布莱エン研究の第一次資料並びに英語による第二次資料がほとんど全て網羅されていることである。これにより、本論文はオ布莱エン研究者にとって非常に価値あるものになると言える。

学位授与に関する委員会の所見

ヴェトナム戦争の生き証人としてその内容や技法に高い評価と人気を得ている現代アメリカ人作家 Tim O'Brien の研究は今だ断片的なものでしかなく、作家論や作品論にしても、様々な論文で他の作家や作品との比較の上で述べているか、作家に特化した単独専門書も三冊程度しか出版されているに過ぎない。本論文は、各議論の展望紹介において少々不明瞭な点があり、文学理論の応用においても不十分な点があることはいなめない。しかしながら、本論文は、これまでの O'Brien 研究作品と比較しても遜色のない総合的研究書として本申請論文を完成させている。したがって、課程博士学位論文として十分な水準に達していると本委員会は評価した。

また、口述試験においても、野村氏は審査委員の指摘に対し足りない点は謙虚に受け入れ今後の出版に向けての課題として積極的に耳を傾ける一方、O'Brien と他の同時代作家達並びに文学史位置付けなどについて十分な知識があることを披露し、単なる作家研究者ではなく、20世紀アメリカ文学全般並びに戦争文学史についても十分な知識があることを証明した。以上により本委員会は全員一致して、野村氏に博士（文学）の学位を授与するに相応しい成果であるとの結論に達した。